吉野秀雄全集

第八巻

吉野秀雄全集

筑摩書房

吉野秀雄全集第八巻

昭和四十五年十二月二十五日第一刷発行
昭和五十二年五月二十日第二刷発行

著者　吉野秀雄
発行者　井上達三
発行所　筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二ノ八
郵便番号　一〇一―九一
電話　東京(三九二)七六五一(代表)
振替　東京六―四一二三

印刷　多田印刷株式会社
製本　株式会社鈴木製本所
落丁・乱丁本はお取替いたします

吉野秀雄全集第八巻　目次

続・艸心洞雑記

浜木綿の北限……三
鎌倉の秋……八
冬と望郷と……二四
身辺閑話……二八
「ゆさゆさと」の句について……三七
頼家の悲劇……三九
詰将棋……四一
鎌倉蓮会記……四四
小学生の頃……五三
「佐渡は四十九里」一説……五五
キンチャク草と老婆……五六
お上りさんの芝居見物……五九
身辺雑記 ―柏崎人往来―……六三
武蔵野の秋……六五
風流幾山河……六八

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

冬日散歩……七三
禁　煙……七七
国民みんなのうた……七八
『福翁自伝』の思ひ出……八〇
禁煙について……八四
タデについて……八六
利休の辞世……八七
見たり聞いたり　―放送時評―……八九
秋ふかき甲州路……九五
のんびりした散歩……九七
歎異抄の寺……一〇〇
或る日本画家のこと……一〇三

続・病中雑記

早春雑話……一〇九
『病牀歌集・天井凝視』といふもの……一一三
風致保存の問題……一一六

或る作歌グループ……一八
このごろ……一二〇
旅へのあこがれ……一二
女とくらし ―新エチケット― ……一二三
清厳和尚の幅……一二七
難病以後百日……一二八
病床生活で身にしみること……一三

歌集を読む

『小林直志歌集』序……一三五
相馬信子歌集『水声』序……一四四
『伊藤呆庵歌集』序……一五七
市島愛詩歌集『ふるさとの花』読後……一六八
木村聰歌集『帰帆集』について……一七三
蜜柑つくりの話 ―鈴木貫介歌集『乾草集』について― ……一八四
或る教育家のはなし ―『牧誠太郎歌集』について― ……一九一

＊

木村捨録歌集『有機』小感……二〇一
水町京子歌集『水ゆく岸にて』を読みつつ……二〇九
清水恒子歌集『麻の花』小感……二二四
広野三郎歌集『あかつき』読後……二三〇
高橋愛次歌集『水上沙上』を読んで……二三六
藤川忠治歌集『練馬南町』一面観……二四四
鈴鹿俊子歌集『虫』を読んで……二四九
長沢美津歌集『雪』について……二五五
広野三郎歌集『泉』を読みつつ……二五七
『栗原潔子歌集』を読んで……二六六
武井ひろ子歌集『破魔矢』のこと……二七二
加藤正明歌集『反照』を読む……二八二
栗田寿美衛歌集『苔の花』読後感……二八五
松本滋代歌集『晩紅花』を読む……二九〇
飯岡幸吉歌集『港の風』読後……二九八
柏倭文子歌集『丘』小評……三〇一
尾山篤二郎歌集『雪客』のこと……三〇八
横内菊枝歌集『寒紅梅』十首抄……三〇九

立花馨歌集『たちばな』について……三三
或るお坊さんの歌集 ―依光亦義歌集『不拒葷酒』のこと―……三六
安立スハル歌集『この梅生ずべし』……三三
西原重敏歌集『雪炎』一読感……三八
白井善司歌集『幻炎』について……三五
秋山光夫歌集『開扉抄』の抄……三八

句集を読む

清水基吉句集『寒蕭々』読後感……三四五
三浦恒礼子句集『野蝶』一読感……三六一
小林希優句集『歌占』の句境……三七七
町田雅尚句集『夏潮』を読みつつ……三七三
儘田司水句集『鴨』を読んで……三八四
針木雹吉句集『鎌鼬』を読む……三九三
井沢正江句集『火樺』抄評……四〇一
服飾に関する俳句 ―『百合子句集』を読みつつ―……四〇九
和賀世人句集『龍の玉』を読んで……四一六

雜纂……四二九
書翰……四四五
年譜……七一一
解題……八二九

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

吉野秀雄全集第八巻

随筆拾遺・歌集句集評・雑纂・書翰・年譜

続・艸心洞雑記

浜木綿の北限

万葉集は柿本ノ人麿の歌に、――

　み熊野の浦の浜木綿百重なす心は思へどただに逢はぬかも

とあつて以来、ハマユフは世に名高い。産地もその「み熊野」を一部とする紀州が最も聞えてゐる。わたしは紀州のはまだ知らぬが、薩摩の指宿（いぶすき）や伊豆の戸田（へた）で花期ならぬ群落を見たことがある。花は三浦三崎の、港を前にした小公園や油壺の水族館の庭などで何度も見た。鎌倉でこれを鉢植ゑにしてゐる知人もあり、栽培をすすめられたこともあるが、冬期の凍みを防ぐために夜は室内に入れ、時には煖房を用ゐなくてはならぬ面倒がいやで、未だ試みたことはない。むろん暖地性海浜植物だが、鎌倉のやうな冬暖の地でもすでに北に偏しすぎるのだ。それなら、果してどこが浜木綿の日本における北限かといふと、三浦半島の佐島の海岸である。――このことはかねて聞いてゐたが、先日横須賀に住むKが、佐島の浜木綿が咲き出したらしいし、そこには幸ひFといふ知り人がゐて、案内させる便もあるといつてきたのを機会に、七月二十五日これを探るための遠足をした。

　逗子へ着いたら、すぐ蘆名行きの臨時バスが出た。佐島は蘆名の向うで、三崎行きを待てばそこ

を通るが、蘆名からは歩いたつて大した距離ではない。満員の客も、葉山の森戸・一色・長者ケ崎や横須賀分の久留和・秋谷などの各海水浴場でだんだんに減り、蘆戸の終点で降りたのはわたし一人だけだつた。

家を出掛けに洋傘を携へた程の深い梅雨曇りだつたのが、逗子では早くも晴れ上り、二十分後の蘆名では目まひしさうなかあツとした炎天になり、洋傘は雨ならぬ日よけの具と化した。そして、さつきバスの中にオードリアン・ヘア・スタイルの娘さんが二人ゐたが、一人のは定丸郎の如く、も一人のはなぜか雀の立ちツ子の頭に似てゐたなどと考へながら、十五分ばかり歩いたら、佐島の停留場に着いた。Kと高校学生のFは約束通り待つてゐた。いや、Kが反対の長井の方角からバスで来て、そこで降り、Fが迎へてゐた様子は、かなり遠くで、わたしの認めえたところだ。

停留場より佐島の部落までは八九丁あらうか、左右に石切場のある小さな峠を越えると、静かな淋しい漁村に出る。葉山あたりの色彩絢爛たる浜とはまるで違つて、数人の小童がばちやばちや泳いでる外、何一つ物音さへしない。浜へ迫る山の崖には鬼百合と河原撫子の花があちこち目につく。前面、海の真ん中に海礁様の島がある。関東大地震の折隆起したもので、毛無島と呼ぶといふが、夏草が靡いてゐて毛有島といひたい気がする。右手に緑樹の茂つた、岬のやうな、島のやうな突出がある。そこが浜木綿花咲く天神ケ島だといふ。

一体、佐島は島の名でなく村の名だが、行政区劃上の実際は横須賀市大楠町佐島で、村ではない。しかし仮にここから横須賀駅へいくとすれば、停留場まで徒歩十五分、長井廻りのバス三十五分、計小一時間とみておかなくてはならない。やはり鄙びた海村といふ外はない。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.